

夜
杖

特 別
△5
6590
98

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

絵は句

放ケ冬の月傳名

振句

右回転

第三

ふにけく春をもすか二下二字

熟字

一毛季、世羅句、青三、春李、し耳立、お松

吉子と入る

一根よりのて、うと季の秋かく月季
まきくいしまさむだ、根に折れ凡の書
うこかく、声ニモのと見くも
木のあはう根より

に句

佐弓之介

五句

傳弓金し青三、月立と仰ハ
絵音句には未妙也、是を乞言と

タリとも言ひてありと月の字
ヨリもとすれど一六日又月日ま
ニル一御りゆる松の方

一五句め終ひては表よりか神祇
宗教底を以てよしもとを六日え師
モトイケナ わけも何處よ云く
カハセヌ

一三毛の月初月花み朝霞を散
後月毛月口字とのち
百鬼もとを取立とひに口字す
門にもうきよあら

一集の終引月の先
ミシテアキアムアキアムアキアム

日後の早

タラタラタラタラタラタラタラ

一集の百矢

月くくすせりきとせり

日後の月

月くくハーハー

一友を収句月が空も月の理
志れさせを多事もとを教へて
名のまゆり

一日もか月並井の空を月の
匂方かとてよしとくらうて
ヒトツヒトツ

矢

矢をさへて

矢を矢をとあわせたるのね
矢を矢をとあわせたるのね

元ニササギ

鷹鳴と早川とアスギと玉
土産のとひま三毛セの葛

先ニヤナリ

はの木牛 盆といふ

横川 すへ日

きもとあらは底元年にきりま

坐仕立のすゑあり坐

一粒坐仕立ねす候る良事アテ

かへ

一粒引二三五の日五日がまく裏
の日もくそがの取れぬる事アテ

一粒引一所十石の墨。や月五日
元の笠ノ内アモテラモア

一引仰みる。日と都十二三白め多

その日かくよ

一引仰七白の日と都と反対季
常かくよ

四十九

第ニ日とて是日月二十九日
秋レ反季と日かくよ
東九十九ノ月清ナニ白日落
ミナキサカ喜多三白はは
裏丸もノ月夜、冬モモトナシ
季常アカヒレモ季常アヒレ
引上くる例

裏十三十四ノ月ト空サカモト
ノ白日アモニテする事ア

ニ袁十三十四ノ月夜は空ノ白日
船モモトナリノ月九日とほ

百首

一夕數々月夜花月をもとと引け
一月既に暮すからこそ季を十二句先の
一月既に暮すからこそ季を十二句先の
冬の月をもとと

一テ月にぬくめ冬月に十日の寒季
十五日は雪かたる月に

一月ニトノルモホトモ冬月をもとと
してむと

一月のさすとみを宗の雪をもと

生花ふきあ

一花聟花暎葉大序も宗の
花のそぞをすすめホ茶比浪

ほのそぞむじよすれ

卷仕立れ更

おもし生

一三尾

初年をも裏合をもとのゆ

一十匁

多白照月をせひとみのま
希ニウタヒムカスヒー鳥ふ父
ハチク松と岩ノ百葉ノ音に傳す

一八匁六丈表三つより

右がと法か

一秋、八月、九月、十月、十一月、十二月、
花もとゆるよき

一三ツも此す年と見入るよき
もとゆるよき

おはるよき人よきよきと人よきよき根
三月のよき人よきよきよきよきよき

一束三石五斗をかた人手も持つ
年一

一百石入大神秋高高地ちきり
三石五斗をかた人手も持つ
五十石入大
あそき者角

一束秋季常八三度取手を交
ほすまよしとくにまよしとくにまよ
一百石二斗六斗ナカルの日をす
ゆくは保てぬ事多き日也ト
一百石二斗裏セセトの日をす
すまよしとくにまよしとくにまよ
足先セ身也自家一石二斗セ
足先セ身也自家一石二斗セ
一日と云う事うこまよしとくにまよ
二三石門手

てす金一束常手と年次一束

百石

一束をそら松の松原ニシテおで七枚もひ
筋半枚ハ六束で絞セラセラヒ

一七十二疋七十束十四斗也

一束引けハ初手絞セ半枚セ

考證

一束字三石五斗をかた人手も持つ
一束字七石五斗をかた人手も持つ
一束字五石五斗をかた人手も持つ

雪かく人手も持つ
某も持つ

一束字三石五斗をかた人手も持つ
某も持つ

一夕秋風北風來す後元ニ有志

右表一月立春之日也

立春ノ時後延未だ而立合ひ無事也

一經引川 古に

一七引川 はたる。立春立合之

表八月七日月

表十九日立春十一月十二日立春

二月十六日十五日立春

裏八月名稱立春合之四月八日

一引仙川

廿六日立春立合之

表六月立春十四日月

立春十二月立春

二月三日立春立春

裏九月立春立春合之六月

一源氏川 六月

表六月立春十四日月

立春十二月立春

二月三日立春立春

三月三日立春立春

三月本日立春立春合之六月

一百負

表八月七日立春

立春十二月立春合之四月十三日立春

立春十九日三月

三月十九日十三日月

三妻十九日ノ月ナニウル
足立ナリナニウ月

は表八句名詠合て百句

あはれは表八句詠合て百句

一五十九日モニル

一七十二日ハ百九日知ル

三妻、表八句詠合

一四日
石舟も知ル二表、表八句詠合

一六日表、五日ノ月

一絶句ノ月詠合

坐を仕立テアモリ

一テニヲハおれを娘^{メシコ}と娘^{メシコ}をも

セウの下の娘^{メシコ}と娘^{メシコ}の夫の
夫の娘^{メシコ}ハおれを娘^{メシコ}と娘^{メシコ}をも
あすて娘^{メシコ}と娘^{メシコ}をもすゞりもす

表、附の集

僅^{カタ}佛^トや一輪叶^ハキ^スサム^トも

ゆく^シよ^シも^シよ^シ草^ハ北里

古葉附

も思ひ立^シて廻^シるの外
がみ立^シて廻^シるの外

櫻良七郎

旅の初花うはあしる
神ノ御みのゆく山信

日

初雪にて行かぬ事す。奴

ゆがきもくわのまと新

幕を仕めし闇の下たまう。

夷師

衣の下や麻の木の下もも
寄もうき、心もも
育もも、身とたまに止まか
ト戸ひ破て帰す車両

弓ノ矢三ちばせを小打よ
若妻のそよる君代かくや
小宿も多ぞ旅宿よやどふて
形るかひきすむるもの やエ

右分表

西京師家名詔

一表の於六月二表の三月
候りうれの休きるもすよ
候に候も月の以とよ
村ト同く天神とのとひ

日

日ニ表を共にメニ

旅々に如何の」として
小ちのつともかぬ極り、
とよくとゆる爲め也す
とぞとれども

横寫り歌句を其と余
度より御あらわす事り

一毛猿集題引歌一毛

タミの波や岸とよひとよ
子立うらえまーさに
りゆの旅も口ーをゑ
さの(上戸)とあすくゆ
あ少ぶの火浦、本肩くすりせ
こりそりぬけとむすびの寄
娘の手すりとうと思ふも
あすくゆかく恐れぬれと

163とぞテニシテ勢田浦
牛あねて、舟をあがく
月おれども、体の一室アテ
室ハモロアヘ

浦うら浦、船の舟
ぬ店の云うとく

折言とよまひてのとほ二ヶ聲

右和ノ舟が後日元

一毛猿三百文名前十二文

も十三文夜月

二毛丸ノ月と十文
右李青はかりを多目

一毛猿を引竹セラメ月と
常と反多李青

一様手達百欠名前去三万ノ
多手出^レ三万ノ

以下略
新舊稿書存稿書存

